「キレる」現象に関する中学年児童の解釈・状態の分析

長 櫓 涼 子
Nagaro　Ryoko

アブストラクト

本研究では、小学校中学年児童を対象とした調査を行い、彼らが「キレる」現象をどのように解釈し、また実際にキレた時にはどのような状態になるのかを分析した。その結果、中学年児童は、「キレる」現象を苛立ちと関連づけて解釈しており、実際にキレた時にも苛立ちをあらわにすることが多かった。また、子ども達は自己の内面に生じた情動興奮を押さえ込んだり、我慢しているが、耐え切れなくなった時に自己の情動を適切に処理しきれなくなることが明らかとなった。

キーワード：児童期　中学年児童　「キレる」現象の解釈　キレた時の状態　高学年児童との比較

問題と目的

「キレる」現象とは、広義には「我慢が限界に達し、理性的な対応ができなくなる」（広辞苑 1998）ことである。1998 年に栃木県黒磯市で発生した男子中学生による教師刺殺事件をきっかけに、子どもの「キレる」現象は社会問題化した（斎藤 1999、正高 2001、長櫓 2010）。その後は思春期の問題として扱われ、大石（1998、1999）を始め、下坂ほか（2000）、小林（2002）、牧田・阪・田中（2000・2002）、牧田（2006）等による報告がなされている。これらの研究によると、「キレる」現象は、自己の内面に溜め込まれた怒り等のネガティブ感情が突発的・衝動的に表出されることが特徴である。

長櫓（2008）は、幼い頃から自己の内面に溜め込んできた気持ちが、精神と肉体のバランスが不安定になりやすい時期に突発的・衝動的に発散されると考え、「キレる」現象そのものが必ずしも思春期に突然起こるわけではないと指摘している。実際に、高学年児童を対象とした「キレる」現象の研究では、多くの者がキレを経験していることが明らかになった。また、高学年の児童は中学生と同様に、「キレる」現象を「怒り」というネガティブな感情と関連させて解釈する傾向が高く、キレた時には相手に対して攻撃的になったり、暴言や悪口などの言動の変化に加え、相手を無視するなどの婉曲した表現方法を用いることがあった。更には、自分をコントロールできなくなり、混乱やパニックを起こすなどの自己制御の不全状態に陥る児童もおり、「キレる」現象は児童期の子どもにとっても深刻な問題であることが示された。

そこで本研究では、長櫓（2008）の研究に引き続き、小学校中学年の児童を対象に調査を実

施する。そして、彼等が「キレる」現象をどのように解釈し、実際にキレた経験を持つ者がいれば、どのような状態に陥りやすいのかを調査し、中学年児童の「キレる」現象の特徴を明らかにすることを目的とする。

方法

(1)　調査方法

質問紙による調査を実施。

(2)　対象児

H県K市のM小学校の協力を得て、小学校3年生184名、小学校4年生163名、計347名を対象に質問紙を実施した。有効回答数は341名（98.2%）である。内訳等の詳細は以下の通りである。

小学校3年生：有効回答数181名（男子91名、女子90名、有効回答率98.3%）
回答者の平均年齢　男子8.67歳（SD値0.47）、女子8.73歳（SD値0.44）
全体8.70歳（SD値0.45）

小学校4年生：有効回答数160名（男子82名、女子78名、有効回答数98.1%）
回答者の平均年齢　男子9.77歳（SD値0.42）、女子9.81歳（SD値0.39）
全体9.79歳（SD値0.41）

(3)　質問紙の内容

長櫓（2008）の高学年児童を対象とした「キレる」現象の解釈・状態の分析に関する調査結果を参考に、指導教授の指導のもと質問紙を作成した。調査を依頼した小学校では、全学年の教員へ調査の趣旨を説明し、作成した質問紙の内容について検討してもらった。そして教員側の意見を反映させ、調査者が質問項目の加筆・修正を行った。出来上がった質問紙は、実際に対象児と同年代の子どもを持つ家庭でプレ調査を実施し、その様子を家族に報告してもらった。その結果、対象年齢の児童が一人で十分に回答できる質問紙であることが確認された。質問紙の内容は以下の通りである。

① **「キレる」現象の意味について**：中学年児童にとって自由記述で自己の内的状態を説明するのは困難な作業であるため、長櫓（2008）の調査結果をもとに、「キレる」現象の意味について選択肢を作成した。全ての児童を対象に、各個人がイメージする「キレる」という言葉の意味について多重回答形式で回答を求めた。

② **「キレる」頻度について**：長櫓（2008）の高学年児童を対象とした調査では、下坂ほか（2000）を参考に日常におけるキレる頻度について、「1.私は、一度もキレたことがない」～「5.私は、毎日のようにキレている」までの5項目を作成している。本研究も同様に、中学年児童のキレる頻度について、「1.私は、一度もキレたことがない」～「5.私は、毎日のようにキレている」までの5項目を作成した。回答形式は全ての児童を対象とした単一回答形式である。

③ **キレた時の状態について**：②の質問で、「2. 私は、今までに何回かキレたことがある」～「5. 私は、毎日のようにキレている」のいずれかに該当した者をキレた体験がある児童と判断し、該当者にはキレた時の状態について回答を求めた。ただし、中学年児童にとって自由記述で自己の内的状態を説明するのは困難な作業であるため、長櫓（2008）の高学年児童を対象とした調査結果をもとに、キレた時の状態に関する選択肢を作成した。回答者には多重回答形式で回答を求めた。

(4) 調査時期

2006 年 12 月上旬～中旬にかけて実施

(5) データの分析方法

①「キレる」現象の意味について、②「キレる」頻度について、③キレた時の状態について、それぞれ、学年別と性別のクロス集計を行い、χ^2検定により学年差と性差を検討した。

結果

(1) 「キレる」現象の意味について：クロス集計の結果を表 1 に示す。

表1. 中学年児童の「キレる」現象の解釈

カテゴリー			イライラした気持ちになる	怒りの気持ちをあらわす	ムカムカした気持ちになる	自分の気持ちを抑えきれなくなる	言葉遣いが悪くなる	攻撃する	やる気がなくなる	体調が悪くなる	その他	合計
3年生	男子	度数	54	50	41	26	33	17	6	2	4	233
		性別の %	23.2	21.5	17.6	11.2	14.2	7.3	2.6	0.9	1.7	100.0
		調整済み残差	-0.5	0.0	-0.6	-1.1	1.2	2.0	-0.5	-0.1	0.6	
	女子	度数	51	43	40	30	21	6	7	2	2	202
		性別の %	25.2	21.3	19.8	14.9	10.4	3.0	3.5	1.0	1.0	100.0
		調整済み残差	0.5	0.0	0.6	1.1	-1.2	-2.0	0.5	0.1	-0.6	
	小計	度数	105	93	81	56	54	23	13	4	6	435
		学年の %	24.1	21.4	18.6	12.9	12.4	5.3	3.0	0.9	1.4	100.0
		調整済み残差	0.3	-0.5	1.4	-1.2	0.1	0.0	0.0	0.1	-0.2	
4年生	男子	度数	48	57	32	39	34	12	6	2	3	233
		性別の %	20.6	24.5	13.7	16.7	14.6	5.2	2.6	0.9	1.3	100.0
		調整済み残差	-1.4	0.9	-0.9	0.6	1.6	-0.3	-0.6	0.0	-0.4	
	女子	度数	60	48	38	34	22	13	8	2	4	229
		性別の %	26.2	21.0	16.6	14.8	9.6	5.7	3.5	0.9	1.7	100.0
		調整済み残差	1.4	-0.9	0.9	-0.6	-1.6	0.3	0.6	0.0	0.4	
	小計	度数	108	105	70	73	56	25	14	4	7	462
		学年の %	23.4	22.7	15.2	15.8	12.1	5.4	3.0	0.9	1.5	100.0
		調整済み残差	-0.3	0.5	-1.4	1.2	-0.1	0.1	0.0	0.0	0.2	
合計		度数	213	198	151	129	110	48	27	8	13	897
		学年の %	23.7	22.1	16.8	14.4	12.3	5.4	3.0	0.9	1.4	100.0

残差＞1.65 † $p < .10$
残差＞1.96 * $p < .05$
残差＞2.58 ** $p < .01$

カテゴリーの出現順位と学年差：学年別のカテゴリー出現順位を以下に示す。

《3 年生》 1 位「イライラした気持ちになる意味」105 名（24.1%）、2 位「怒りの気持ちをあらわす意味」93 名（21.4%）、3 位「ムカムカした気持ちになる意味」81 名（18.6%）

《4 年生》 1 位「イライラした気持ちになる意味」108 名（23.4%）、2 位「怒りの気持ちをあらわす意味」105 名（22.7%）、3 位「自分の気持ちを抑えきれなくなる意味」73 名（15.8%）

Pearson の χ^2 検定の結果、「キレる」現象の解釈に学年差は無かった（χ^2（8）= 3.235, p = n. s）。

カテゴリーの出現順位と性差：各学年の性別によるカテゴリー出現順位は次の通りである。

《3 年生男子》 1 位「イライラした気持ちになる意味」54 名（23.2%）、2 位「怒りの気持ちをあらわす意味」50 名（21.5%）、3 位「ムカムカした気持ちになる意味」41 名（17.6%）

《3 年生女子》 1 位「イライラした気持ちになる意味」51 名（25.2%）、2 位「怒りの気持ちをあらわす意味」43 名（21.3%）、3 位「ムカムカした気持ちになる意味」40 名（19.8%）

Pearson の χ^2 検定の結果、「キレる」現象の解釈に性差は無かった（$\chi^2(8) = 7.410$, p = n. s）。

《4 年生男子》 1 位「怒りの気持ちをあらわす意味」57 名（24.5%）、2 位「イライラした気持ちになる意味」48 名（20.6%）、3 位「自分の気持ちを抑えきれなくなる意味」39 名（16.7%）

《4 年生女子》 1 位「イライラした気持ちになる意味」60 名（26.2%）、2 位「怒りの気持ちをあらわす意味」48 名（21.0%）、3 位「ムカムカした気持ちになる意味」38 名（16.6%）

Pearson の χ^2 検定の結果、「キレる」現象の解釈に性差は無かった（$\chi^2(8) = 5.967$, p = n. s）。

(2) **「キレる」頻度について**：クロス集計の結果を表2に示す。

表2. 中学年児童の「キレる」頻度

カテゴリー			一度もキレたことがない	今までに何回かキレたことがある	月に1～2回はキレる	週に何回かキレる	毎日のようにキレている	合計
3年生	男子	度数	6	41	18	16	10	91
		性別の%	6.6	45.1	19.8	17.6	11.0	100.0
		調整済み残差	-0.6	-2.0	1.2	0.8	1.6	
	女子	度数	8	54	12	12	4	90
		性別の%	8.9	60.0	13.3	13.3	4.4	100.0
		調整済み残差	0.6	2.0	-1.2	-0.8	-1.6	
	小計	度数	14	95	30	28	14	181
		学年の%	7.7	52.5	16.6	15.5	7.7	100.0
		調整済み残差	0.8	1.7	-0.2	-2.3	-0.1	
4年生	男子	度数	5	39	15	18	5	82
		性別の%	6.1	47.6	18.3	22.0	6.1	100.0
		調整済み残差	0.3	1.2	0.3	-1.1	-1.0	
	女子	度数	4	30	13	23	8	78
		性別の%	5.1	38.5	10.7	29.5	10.3	100.0
		調整済み残差	-0.3	-1.2	-0.3	1.1	1.0	
	小計	度数	9	69	28	41	13	160
		学年の%	5.6	43.1	17.5	25.6	8.1	100.0
		調整済み残差	-0.8	-1.7	0.2	2.3	0.1	
合計		度数	23	164	58	69	27	341
		学年の%	6.7	48.1	17.0	20.2	7.9	100.0

残差>1.65 † $p < .10$
残差>1.96 * $p < .05$
残差>2.58 ** $p < .01$

「キレる」頻度の学年差：クロス集計の結果を以下に示す。

《3 年生》181 名の回答のうち「今までに何回かキレたことがある」と回答した児童が 95 名（52.2%）と最も多く、「一度もキレたことがない」と回答した児童と「毎日のようにキレている」と回答した児童は 14 名（7.7%）と最も少なかった。

《4 年生》160 名の回答のうち「今までに何回かキレたことがある」と回答した児童が 69 名（43.1%）と最も多く、「一度もキレたことがない」と回答した児童は 9 名（5.6%）と最も少なかった。

Pearson の χ^2 検定の結果に学年差は確認されなかった（$\chi^2(4)=6.496$, p = n. s）。

「キレる」頻度の性差：クロス集計の結果を以下に示す。

《3 年生男子》「今までに何回かキレたことがある」と回答した児童が 41 名（45.1%）と最も多く、一方「一度もキレたことがない」児童は 6 名（6.6%）と最も少ない。

《3 年生女子》「今までに何回かキレたことがある」と回答した児童が 54 名（60.0%）と最も多く、一方「毎日のようにキレている」と回答した児童は 4 名（4.4%）と最も少ない。

Pearson の χ^2 検定の結果に性差は確認されなかった（$\chi^2(4)=6.402$, p = n. s）。

《4 年生男子》「今までに何回かキレたことがある」と回答した児童が 39 名（47.6%）と最も多く、一方「一度もキレたことがない」「毎日のようにキレている」と回答した児童が 5 名（6.1%）と最も少ない。

《4 年生女子》「今までに何回かキレたことがある」と回答した児童が 30 名（38.5%）と最も多く、「一度もキレたことがない」児童は 4 名（5.1%）と最も少ない。

Pearson の χ^2 検定の結果に性差は確認されなかった（$\chi^2(4)=2.632$, p = n. s）。

(3)　**キレた時の状態について**：クロス集計の結果を表 3 に示す。

表3. 中学年児童のキレた時の状態

カテゴリー			イライラした気持ちになる	言葉遣いが変わる	怒りの気持ちでいっぱいになる	ムカムカした気持ちになる	攻撃する	自分の気持ちを抑えきれない	やる気がなくなる	我慢する	悲しくなる	体調が悪くなる	その他	合計
3年生	男子	度数	54	47	36	31	**36	19	12	**12	*6	2	4	259
		性別の％	20.8	18.1	13.9	12.0	13.9	7.3	4.6	4.6	2.3	0.8	1.5	100.0
		調整済み残差	-0.4	1.1	1.3	-1.1	3.0	0.8	-0.4	-2.7	-2.0	-0.3	-1.3	
	女子	度数	45	29	20	31	**11	11	11	**23	*12	2	7	202
		性別の％	22.3	14.4	9.9	15.3	5.4	5.4	5.4	11.4	5.9	1.0	3.5	100.0
		調整済み残差	0.4	-1.1	-1.3	1.1	-3.0	-0.8	0.4	2.7	2.0	0.3	1.3	
	小計	度数	99	76	56	62	†47	*30	23	**35	18	4	11	461
		学年の％	21.5	16.5	12.1	13.4	10.2	6.5	5.0	7.6	3.9	0.9	2.4	100.0
		調整済み残差	0.4	-1.3	-1.0	0.4	1.6	-2.0	-0.9	3.4	0.7	-0.8	0.6	
4年生	男子	度数	47	52	35	28	19	26	14	7	6	3	7	244
		性別の％	19.3	21.3	14.3	11.5	7.8	10.7	5.7	2.9	2.5	1.2	2.9	100.0
		調整済み残差	-0.6	0.8	0.0	-0.7	0.5	0.4	-0.6	0.3	-0.8	-0.4	1.7	
	女子	度数	52	44	35	33	16	23	17	6	9	4	2	241
		性別の％	21.6	18.3	14.5	13.7	6.6	9.5	7.1	2.5	3.7	1.7	0.8	100.0
		調整済み残差	0.6	-0.8	0.1	0.7	-0.5	-0.4	0.6	-0.3	0.8	0.4	-1.7	
	小計	度数	99	96	70	61	†35	*49	31	**13	15	7	9	485
		学年の％	20.4	19.8	14.4	12.6	7.2	10.1	6.4	2.7	3.1	1.4	1.9	100.0
		調整済み残差	-0.4	1.3	1.0	-0.4	-1.6	2.0	0.9	-3.4	-0.7	0.8	-0.6	
合計		度数	198	172	126	123	82	79	54	48	33	11	20	946
		学年の％	20.9	18.2	13.3	13.0	8.7	8.4	5.7	5.1	3.5	1.2	2.1	100.0

残差>1.65　† p < .10
残差>1.96　* p < .05
残差>2.58　** p < .01

カテゴリーの出現順位と学年差：学年別のカテゴリー出現順位は次の通りである。

《3年生》 1位「イライラした気持ちになる」99名(21.5%)、2位「言葉遣いが変わる」76名(16.5%)、3位「ムカムカした気持ちになる」62名（13.4%）

《4年生》 1位「イライラした気持ちになる」99名(20.4%)、2位「言葉遣いが変わる」96名(19.8%)、3位「怒りの気持ちでいっぱいになる」70名（14.4%）

Pearson の χ^2 検定の結果に学年差があり（χ^2（10）= 22.180, $p < .05$）、残差分析の結果、「我慢する」（$p < .01$）や「攻撃する」（$p < .10$）は、3年生が有意に高かった。一方、「自分の気持ちを抑えきれない」（$p < .05$）のは4年生が有意に高い。

カテゴリーの出現順位と性差：各学年の性別によるカテゴリー出現順位は次の通りである。

《3 年生男子》 1 位「イライラした気持ちになる」54 名（20.8%）、2 位「言葉遣いが変わる」47名（18.1%）、3位「怒りの気持ちでいっぱいになる」「攻撃する」36名（13.9%）

《3年生女子》 1位「イライラした気持ちになる」45名（22.3%）、2位「ムカムカした気持ちになる」31名（15.3%）、3位「言葉遣いが変わる」29名（14.4%）

Pearson の χ^2 検定の結果に有意差があり（χ^2（10）= 24.733, $p < .01$）、残差分析の結果、キレた時に「攻撃する」（$p < .01$）のは男子の方が有意に高かった。一方の女子はキレた時に「我慢する」（$p < .01$）や「悲しくなる」（$p < .05$）ことが有意に高い。

《4 年生男子》 1 位「言葉遣いが変わる」52 名（21.3%）、2 位「イライラした気持ちになる」47名（19.3%）、3位「怒りの気持ちでいっぱいになる」35名（14.3%）

《4年生女子》 1位「イライラした気持ちになる」52名（21.6%）、2位「言葉遣いが変わる」44名（18.3%）、3位「怒りの気持ちでいっぱいになる」35名（14.5%）

Pearson の χ^2 検定の結果に有意差が無く（χ^2（10）= 5.639, p = n. s）、従ってキレた時の状態に性差は見られなかった。

考察

本研究の目的は、小学校中学年の児童が「キレる」現象をどのように解釈し、キレた経験を持つ児童はどのような状態に陥りやすいのかを調査することで、中学年児童の「キレる」現象の特徴を明確にすることであった。本研究で得られた結果について、以下に考察をする。

(1) 「キレる」現象の解釈について

4年生の男子以外は、「キレる」現象をイライラした気持ちになることと関連付けて解釈することが最も多かった。次いで、怒りの気持ちをあらわすことと関連付けた解釈が多い。従って、中学年の児童は、自己の内面で生じる苛立ちなどの情動興奮を「キレる」現象と解釈していることが明らかである。

長櫓（2008）の高学年児童を対象とした調査では、「キレる」現象を怒りの気持ちとし関連付けて解釈する児童が多かった。そして、怒りを攻撃性などの身体で直接訴える幼い解釈から、

言語攻撃などの間接的でより複雑化した解釈へと変化させていく学年を軸とした発達を見ることができた。本研究では、「キレる」現象の解釈に、学年や性別を軸とした発達を見ることはできなかった。しかし、子どもが怒りを「キレる」現象として直接的・間接的に表現するようになるまでには、苛立ちという情動興奮状態があると解釈されていることが見て取れる。

(2) 中学年児童の「キレる」頻度

本研究では、「キレる」頻度に学年差や性差は見られなかったが、「一度もキレたことがない」と報告した児童の数が非常に少なかったことから、中学年児童でも何らかのかたちで「キレる」現象を経験していると言える。ただし、「キレる」現象の解釈には、程度の個人差があることが予想され、そのことが「キレる」頻度の回答にも影響を及ぼしている可能性がある。

次に、「キレる」頻度で得られた結果をもとに、キレたことのある児童を対象として、中学年児童が実際にキレた時にはどのような状態になるのかを分析した。

(3) 実際にキレた時の状態について

中学年児童の場合、実際にキレた時は4年生の男子以外は、イライラした気持ちになると回答した児童が最も多かった。その他には、言葉遣いが変わったり、怒りの気持ちでいっぱいになる、ムカムカした気持ちになるなどの回答が上位を占めた。更に3年生と4年生の間に学年差が見られ、我慢する傾向や、相手や物に対して攻撃する傾向は3年生に多く、自分の気持ちを抑えきれなくなる傾向は4年生に多かった。

長櫓（2008）の高学年児童の調査では、言葉の語彙力や表現力が発達するに伴って、自己の内面に溜め込んでいた情動興奮を直接的に身体で表現する方法は減っていき、言葉で発散したり、相手を無視するなど婉曲した表現方法を用いるようになっていた。この度の中学年児童を対象とした研究結果では、子ども達がまだ自己の内面にある情動興奮状態をうまく発散するための術を心得ておらず、気持ちを抑え込んだり、キレることを我慢していると考えられる。しかし、最終的には、堪え切れなくなった感情が乱暴な言葉で表現されたり、相手や物を攻撃するという直接的な方法で発散されているのが特徴と言える。また、学年を軸とした発達を追うと、年齢を重ねるに従って、人や物への攻撃行動は減少していくが、自分の気持ちをコントロールできないなどの状態に陥るケースが増えてくることから、子ども達が自己の情動を適切に処理しきれていないことが明らかである。

更に詳細に見ていくと、キレた時の状態は3年生に明確な性差が見られ、男子は女子に比べて、相手や物に対する攻撃行動を示すことが有意に多く、一方の女子は、キレた時に我慢したり、気持ちが悲しくなるなどの回答が男子に比べ有意に多かった。このことから、男子の「キレる」現象は個人が置かれた状況に外向的に発散される一面があるのに対し、女子の場合は「キレる」現象が自己に向かう内向的な一面があることが明らかである。

これまでの先行研究でも、「キレる」現象の性差について議論がなされており、男子の方がキレやすいという結果（冨岡 2002）が示される一方で、女子の方がキレやすいという結果も示さ

れている（牧田・阪・田中 2000、小林 2005）。しかし、今回の研究結果より、「キレる」現象そのものは男女を問わず誰にでも起こる現象であると言えよう。ただ、その表現方法が性別によって異なるだけである。

まとめと今後の課題

今回の調査結果より、「キレる」現象は、個人に生じた苛立ちや怒りなどのネガティブな感情が適切に処理しきれずに起こっていることが明らかである。調査で得られた結果をもとに、今後は子ども自身が自己の内面に生じた感情をどのように受入れて、対処していけばよいかという感情教育についても力を注ぎたい。また、感情発達は生まれて間もない乳幼児期から既に始まっているのだが、近年では、保育・幼児教育の現場でも徐々に「キレる」子どもの事例が報告されるようになってきている（宮里 2001）。そのため、幼児期を対象とした研究の必要性を感じているが、これについては今後の課題としたい。

参考文献

東洋・繁多進・田島信元（編）　1992　『発達心理学ハンドブック』　福村出版.

小林秀資　2002　キレる子ども達に学ぶ－「思春期における暴力行為の原因究明と対策に関する研究」に取組んで－　小児保健研究 61(4), 543-551.

小林正子　2005　「キレる」に関する中高生の生活状況調査からの検討　保健医療科学,54(2), 101-107.

牧田浩一・阪武彦・田中雄三　2000　中学生の「むかつき」「キレる」現象に関する意識調査　九州神経精神医学,46,(1~3),189-195.

牧田浩一・阪武彦・田中雄三　2002　「むかつき」「キレる」現象と攻撃性との関連性及び SCT（文章完成法テスト）の特徴　九州神経精神医学,48(1), 15-27.

牧田浩一　2006　「キレる」心性とトラウマ的体験との関連　鳴門教育大学研究紀要,21, 77-82.

正高信男　2001　「キレる」心と幼児体験　心理学ワールド,14, 17-20.日本心理学会.

宮里六郎　2001　『「荒れる子」「キレル子」と保育・子育て』　かもがわ出版.

長櫓涼子　2008　「キレる」現象に関する高学年児童の解釈・状態の分析　聖和大学論集第 36 号 A 235-244.

長櫓涼子　2010　「キレる」現象に関する中学生の解釈・状態の分析　関西学院大学教育学論究第 2 号,157-167.

大石英史　1998　“キレる”子どもの心理的メカニズムに関する一考察　山口大学教育学部研究論叢,48(3), 109-121.

大石英史　1999　現代の“ムカつき”“キレる”中学生の心理　山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要,10, 107-118.

斎藤孝　1999　『子どもたちはなぜキレるのか』　ちくま新書.

下坂剛・西田裕紀子・齊藤誠一・伊藤崇達・神藤貴昭・柳原利佳子・鶴田弘子・

九木山健一・西田紀子・西村亜希子・夏本千春・坂本由佳・前川雅子　2000
現代青少年の「キレる」ということに関する心理学的研究(1)－キレ行動尺度作成および SCT による記述の分析－　神戸大学発達科学部研究紀要,7(2), 1-8.

新村出（編）　1998　『広辞苑第五版』　岩波書店.

富田賢治　2002　「突発性攻撃行動および衝動」を示す子どもの発達過程に関する研究－「キレる」子どもの成育歴に関する研究－　国立教育政策研究所内発達過程研究会.